悪霊　第五部・砂上の王国

【登場人物】

伊集院満枝……H市の地主の娘
猪俣佐和子……満枝の元クラスメイト。東京で左翼活動に従事。党員となる
増田小百合……旧姓・安西。伊集院満枝の一年後輩
佳代……貧しい農家の娘。党のハウスキーパー
喜代美……女工。党に派遣されモスクワに留学
李麗姫（イヨヒ）……女性抗日パルチザン
小沼健吾……労働運動家。伊集院家の元小作人
三沢……党中央委員
大橋多喜蔵……党員。プロレタリア作家
増田喬……小百合の夫
悦子……家出した少女
五郎……不良少年
加藤寅二郎……脚本家
江戸川……探偵小説家
田中少佐……上海の謀略機関に属する陸軍将校
「清朝の王女」……田中少佐の「愛人」と噂される女性

昭和六年（一九三一）年十一月〜昭和七年一月。東京市、満州、弘前市、上海

Ⅱ

夜の闇を、数多く立ち並ぶ照明灯が吹き払っていた。

日比谷公園の一隅に設けられた野外音楽堂のステージには、仮設のリングが設けられていた。立ち見と合わせて三千人近くを収容できる座席は、洋装のモダンボーイに連れられたモダンガール、黒の詰め襟姿の学生で、満席に近い。もうもうと煙草の煙がたなびき、煎餅（せんべい）やキャラメルを売る声がやかましく響いている。

二年前に同じ場所で、日本で初めて拳闘のタイトルマッチが行われた。以来、拳闘はモダンの象徴として、若い男性の間で流行（はや）りのスポーツとなっている。

ハワイから来日したアメリカ人ボクサーと日本人選手の試合を見るため詰めかけた客のなかに、釣り鐘帽（クローシュ）を目深（まぶか）にかぶった洋装の猪俣佐和子の姿もあった。

右隣に来るはずの男は、いまだ現れない。すでに、最初の試合が始まっていた。トランクスひとつの男たちが、相手の顔面めがけて拳をぶつける。グローブをはめた拳が相手のからだに当たる度に、どさっと重い音が響き、野獣のような歓声があがる。

暴力に酔っているのだ……。佐和子は周りを見回した。眼をぎらつかせて、そこだ、打て！やっちまえ！　とわめく観客たち。まるで酒を呑んで騒ぐカフェの客のようだった。

リング上で、顎にパンチを食らった選手が、仰向けに倒れる。レフリーがカウントを始めると、観客は総立ちになった。倒れた選手は、虚ろな眼差しで、唇を半ば開き、細かく痙攣している。

川奈昭三や、横浜で出会った見知らぬ男。かつて佐和子が去勢した男たちの苦悶の表情が脳裡に浮かんだ。
「やあ、どうも」
声を掛けられた方を向くと、右隣に、仕立てのいい、しかしどこか垢抜けないスーツにボルサリーノ帽をかぶった男が座っていた。三十歳になるかならぬかだろうか、鼻髭をたくわえた色男である。半年のカフェ勤めの経験から、堅気の仕事をやっている男ではなさそうなことは、佐和子にも察せられた。
「井上さんだよね」
「ええ」
「植木(うえき)です。よろしく」
気取って会釈する植木に、佐和子は無言で頭を下げた。佐和子の知っている「党員」といえば、大学を卒業したエリートか、工場でたたき上げた労働者であった。植木のような、水商売の匂いを漂わせている党員は見たことがない。たとえ、「井上」という「党」でのみ通用する佐和子の偽名を知っているとしても、ほんとうに三沢に命ぜられて佐和子に会いに来たのかどうか、疑念が晴れなかった。
「拳闘(ボクシング)は初めて？」
煙草に火を点(つ)けながら、植木はなれなれしく問うた。
「はい」
「どう、感想は？」

「そうですね……」
言葉を濁す佐和子を一瞥し、植木は言った。
「この試合が終わったら、君はあたしと一緒に、銀座の店でいっぱいやらにゃならんのだよ」
「……」
「そこで、肝心な話をするよう、三沢さんから言いつかってる。いわば、今は恋人同士のランデブーなんだ。そんなに硬くなってちゃいけないね」
笑顔でそう言われ、佐和子は疑念をひとまず措くことにした。三沢の名前を出す以上、偽者ではあるまい。
「わかりました」
佐和子の答えに、植木は、まるで女学生と先生みたいだ、と笑った。リングには、新たな選手があがり、ゴングと同時に両手で顔をガードして対峙し、細かなステップを踏み始めた。
軽量級選手による数試合の後、ハワイから来た大柄な白人選手と日本人選手が三試合を戦い、すべてハワイ側の勝ちとなり、大会は終わった。
「なかなか、面白かったわ」
銀座のレストランに落ち着くと、佐和子は、女給の口調を作って言った。
「殴り合いって、面白いものなのね」
「殴り合いじゃあない」
植木は言った。
「これは、ちゃんとルールのあるスポーツなんだよ、たとえば……」

選手がはいているトランクスがあるだろ？　あれより下にパンチを出すと、ロウ・ブロウという反則になる。植木の説明に、佐和子は、ああ、納得したわ、と言った。
「納得？」
「ええ……だって、なんで急所を狙わないのかと、不思議だったの」
植木は哄笑した。
「あんた、なかなか面白い女だな」
「え？」
「なるほどね、たまを狙えば、確かにいちころだ。だが、そいつはいちばんやっちゃいけないことなの」
「そうなんですの？」
「ああ。たとえ喧嘩であってもね」
笑みとともに歪んだ唇は、植木という男がくぐってきた修羅場を想像させた。
「喧嘩は勝てばいいってわけじゃない。どちらが、より男らしいかを競う勝負なんだ。急所を狙うような奴は、卑怯者てぇんで男を下げることになる」
やはり、堅気の男ではない……。佐和子はそう感じた。
「それで……」
佐和子は、居住まいを正して問うた。
「今夜は、何を話し合えばいいの？」
植木も咳払いをして背筋を伸ばし、それから急に姿勢を崩して笑い出した。

「なんですの？」
訝しげに訊ねる佐和子に、植木は、失敬失敬、と謝った。
「いえね、三沢さんが見込んだとおりだって思ったもんだから」
「え？」
「いざとなりゃ、男の股ぐら蹴り上げるくらい度胸のある女じゃなきゃ、この仕事は務まらねえからさ」

二時間後。
銀座の別のカフェで、植木は三沢と会っていた。
「どうだったね」
テーブルにつくなり、三沢は訊ねた。
「一応、承知しましたけどね」
植木は答えた。
「納得はしてないみたいですぜ」
「そりゃ、仕方ないだろう」
三沢は、運ばれてきたビールに口をつけて言った。
「誰だって躊躇（ためら）うに決まってる。なんと言ってもお嬢さん育ちの生娘（きむすめ）なんだから」
「生娘なんですかい？」
「そうさ」

「だったら、やりようはありますぜ」
「なんだ？」
「とにかく、いてこましちまうんですよ。操を捧げた男には忠実な兵隊になるのが、女ってもんでさ。あたしに任せてくれりゃあ、明日からでも働きますぜ」
「言っておくが……」
三沢の眼に冷たい光が走った。
「お前は、もはや俺たちの同志だ。俺のやり方に従ってもらう」
「……」
「組長の女に手を出して、行き場がなくなったお前を拾ってやったのは、誰だ？」
「勘弁してくださいよ」
植木は卑屈な笑いを浮かべた。
「分かってますよ。感謝しておりやす。ただね、お嬢さん育ちの生娘にとっちゃ、この仕事はきついですぜ。色仕掛けで男を騙して金を巻き上げようってんだから」
「なあに、あの女はやるさ。焦ることはない」
三沢は言った。
「それより、お前に頼みがある」
「なんです？」
三沢はポケットから紙片を取り出し、テーブルに置いた。
「この女を、脅せ」

「へ？」
「井上が勤めている店にやってきては、何か嗅ぎ回っているらしい。ゆくゆくは任務の邪魔になるだろうから、東京にいられなくしてほしい。変な真似はするなよ。ちょっと脅して、田舎に帰らせればいい。お前は直接手を出すな。知り合いを使え。それも、俺たちとは関係ない奴をだ」
「増田小百合……ねえ」
植木は紙片を眺めて呟いた。そこには、小百合の名前と、寄宿している加藤寅次郎の家の住所が書かれていた。
「わかりやした」
植木は頷いた。
「そういうことなら、任せてくださいよ」

その翌日の午後。
増田小百合は、いつものように寄宿している加藤寅次郎の家を出て、浅草へと向かった。東京に出てきて一週間を越え、だいぶ浅草にも慣れた。
スワンには顔を出さないよう猪俣佐和子に言われてから、あの店には近づいていない。とはいえ、家でじっとしているのも、いたたまれなかった。
しばらく雑踏を歩き、歩きつかれた小百合は、瓢箪池と呼ばれる人工の沼のほとり、常盤木の陰に置かれたベンチに腰をおろした。
日が傾きかけていた。すでに十月も終わろうとしている。日が落ちるのが早まっている。今日

も、徒労に終わりそうだった。
東京に来てから、いったい何人の人の顔を見ただろう。とても数え切れない。そして、そのなかに悦子の顔はなかった。
やはり、無理なのだろうか……。東京は大きい。人の数も多い。H市や弘前とは比べ物にならない。
喉の渇きを覚えた。ラムネでも買おうかしら……。ベンチから立ち上がった小百合の前に、人が立ちはだかった。
「小百合さんかい？」
見たこともない顔だった。年は二十歳になるかならぬかだろうか、派手な柄の背広に、サスペンダーで吊ったズボン、鳥打帽をかぶった若い与太者だった。
「はい……」
小百合は強張った面差しで頷き、何か御用でしょうか？　とおそるおそる訊ねた。
その丁寧な口調に、与太者は笑って言った。
「ちょいと、顔貸してほしいんだ」
「え？」
「こっちに来なって言ってるんだよ」
手首をぐいと掴まれた。小百合の全身が硬直し、からだの芯を冷たいものが走り抜けた。

しばらく後。

猪俣佐和子は、スワンの更衣室でサテンのドレスに着替え、エプロンをつけていた。すでに秋も深く、半袖の制服は寒さを感じさせたが、女給の二の腕は、この店の売り物のひとつとあっては仕方がない。
時計の針は五時を指そうとしていた。五時と同時に看板のネオンに電気が入り、酒が出ることを示す。それと同時に、客がどっと入ってくるだろう。
カレンダーを見て、曜日を確かめる。今日は、坂部という材木商が来る日だ。佐和子を贔屓にしている客のなかでも、もっとも金離れのよい男だった。
あんたの贔屓のなかで、いちばんの金持ちの愛人になれ。なるふりをするだけでいい。うまくいったら、俺に知らせろ。そいつを脅して、金を巻き上げる。
植木の指示を思い出していた。それが、いわゆる美人局と呼ばれる行為であることを知らぬ佐和子ではない。
承知しました、と返事したものの、さすがに心は揺れていた。玉の井で三沢に、新たな任務を説明された時には、心を決めたはずだった。それなのに、いざ、具体的な指示を与えられると、どうしても嫌悪感が先に立ってしまう。
男の手で抱かれる……。そう思うと、からだじゅうの神経がささくれだち、息苦しくなってしまう。
そういえば……。佐和子はふと思った。
増田小百合の正体を調べてくれるよう、連絡員を通じて三沢に頼んだが、どうなっただろう。あれから小百合は姿を見せない。あるいは、諦めて東京を離れたのだろうか。

店のドアが開いた。
「いらっしゃいませ！」
女給たちが店に飛び出した。佐和子も立ち上がり、スカートの裾を直した。
店内から、ざわめきが伝わってきた。
どうしたんです！　男の給仕の慌てた声が聞こえてきた。
店に出て、佐和子は立ちすくんだ。
ドアのところに増田小百合が立っていた。頬が赤く腫れ、唇のあたりに乾いた血がこびりついている。
うつろな眼が店のなかを彷徨い、佐和子に向けられた。同時に、小百合の面差しが引き締まり、眼に怒りの火がともった。
「猪俣さん！」
小百合は叫んだ。
久しぶりに呼ばれる本名だった。
「あなたでしょう、こんなことをしたのは！」
女給たちの眼がいっせいに佐和子に注がれた。いのまたさん……？　里江さんは、井上さんじゃなかったの……？　女給たちが囁きあう声が佐和子の耳に入った。
「わたくし、絶対に東京を離れないわ！　絶対に、悦っちゃんを見つけ出すまでは、ここにいるわ！　追い出そうったって無駄ですからね！」
小百合は身を翻し、店を去った。

その二日後の昼過ぎ。
新宿の中村屋は二十年ほど前に創業し、日本にはじめて純インド式のカレーを紹介した有名な店である。その店で、猪俣佐和子は植木と会っていた。佐和子が連絡員を通じて呼び出したのである。
「新しく、いいカモでも見つけたかい？」
テーブルにつくなり、植木は訊ねた。
その斜に構えた口調に嫌悪感を覚えながら、佐和子は訊ねた。
「増田小百合という女性を知ってる？」
「ああ」
植木は軽く答えた。
「あんたの頼みどおり、ちゃんとやっといたから、安心しな」
「私の頼み？」
眼を見開く佐和子に、植木は怪訝な顔で問うた。
「増田小百合ってのは、あんたのことを嗅ぎまわってた女だろ。あんたの仕事の妨げになるから、東京から追い出すよう、三沢さんに言われたんだ。安心しろ、その女、二度とあんたのところには近づかないようにさせといたからよ」
硬い面差しを崩さない佐和子に、植木は首を傾げた。
「なんだよ、その顔は。そもそもは、あんたが三沢さんに頼んだことなんだろうが」

それには答えず、佐和子は押し殺した声で問うた。
「いったい、彼女に何をしたの？」
「いや、だから……知り合いに頼んで、ちょいと脅かしてやれ、と」
「まさか……」
佐和子の全身が震え始めた。
「彼女を……」
「いや、変なことはしてねえって」
植木は弁解がましく言った。
「本当に、ちょいと脅せばいいって言っただけだよ。へんな真似は絶対にするなって三沢さんからもきつく言われてたしね」
「その娘……、一昨日、店に来たわ」
「え？」
「顔を赤く腫らして、口から血が出ていた。あんたが頼んだ男の仕業でしょうね……」
「本当かい？」
「本当よ」
「あの野郎、暴力はいけねえって言っておいたのに、しょうがねえな」
舌打ちする植木の手首を、佐和子は掴んだ。
「みんなが見てる前で、私、こう言われたわ」
怒りのこもった眼差しに息を呑む植木に、佐和子は言葉を搾り出した。

「絶対に東京を離れないって……」
「本当かい？」
「どうしてくれるのよ！」
佐和子はテーブルを叩いた。他の客の眼差しが一斉に注がれた。
「だいたい、私、何も聞いてないわよ！　ただ、彼女の素性を調べてくれって頼んだだけなのに、なぜ、私に何も聞かないで、暴力を振るったりしたの？」
「おい、静かにしろよ。第一、俺は……」
「あの子、また毎日のように店に来るようになっちゃったのよ！」
落ち着けよ……。植木は狼狽して腰を浮かし、佐和子の肩を掴んで宥めようとしたが、佐和子はその手を振り払って叫び続けた。
「店長からは、何があったのかとしつこく聞かれるし……私、もうあのお店にはいられないわ。本当に、どうしてくれるのよ！」

その頃。
増田小百合は、スワンのテーブルに座り、コーヒーカップを前に、無言で俯いていた。
「また、来てるのかい？」
更衣室に入ってきたのは、売れっ子女給の直美だった。あ、直美姐さん、おはようございます。早番の女給たちが直美に集まってきた。
今日は早いですね、と訊ねる女給たちに、買い物していたら、あの子が店に入るのが見えたか

らさ、と直美は答えた。
　そうなんですよ。あの騒ぎがあってから、本当に困っちゃうわ。いったい、あの子、里江さんとどういう関わりがあるのかしら。口々に言う女給たちを尻目に、直美は店に向かった。
「いらっしゃいませ」
　テーブルの傍らに立ち、声をかけると、小百合は顔をあげた。仮面をかぶったような面差しで、直美を見つめる。顔の腫れはいくぶん引いたようだが、口元の傷はまだふさがりきっていないようだった。
「お話ししたいことがあるのだけれど、他の店に行かない？」
　直美の言葉に、小百合はやっと面差しを動かし、え？　と喉の奥で言った。虚を突かれたように見つめる小百合を促し、直美は店を出た。

「田舎者は頑固だねぇ……」
　スワンを出て「サファイヤ」という店に移ってからも、黙ったまま身を固くして座る小百合を前に、しばらく煙草をふかしていた直美は、不意に相好を崩して笑った。
　きょとんとした顔の小百合に、直美は、あたいも上京した頃はそうだったな、と付け加え、それから居住まいを正した。
「こないだ、あんたを殴った男、二十歳くらいの鳥打ち帽をかぶった、ちょいといい男じゃなかったかい？」
　小百合は、言葉もなく眼を見張った。そのとおりだった。訝しがる小百合に、直美は言った。

「浅草で起こったことで、あたいの耳に入らないことはないのさ」
　それから、小百合から眼をそらし、呟くように言った。
「そいつの名前は五郎って言ってね。女を殴るくらい平気の平左な札付きの悪さ。女を殴る度に、あたりかまわず吹聴するような奴だ。酒を呑みながら、誰かに頼まれて東北から来た田舎娘を殴りつけ、東京から出て行けと脅してやったと自慢していたそうだから、てっきりあんたのことじゃないかと思ったけど、どうやら、図星だったみたいだね」
　煙草を灰皿でもみ消し、直美は続けた。
「その五郎って奴だけどね、ひょっとしたら、あんたの探してる家出娘のことも、知ってるかもしれないよ」
「え！」
　小百合は身を乗り出した。その小百合を手で制して、直美は言った。
「忘れたのかい。前に言っただろう？　この浅草じゃ、たとえ知っていても、口に出しちゃいけないことがあるってさ」
　直美は、小百合から眼をそらしたまま、二本目の煙草に火を点けた。
「だから、これから言うことは、私の独り言。悪党とはいえ、同じこの浅草で生きる仲間のことを喋るわけだから。あんたもそのつもりで聞きな。いいね？」
　はい……。小百合は小さく頷いた。直美は小百合を一瞥し、さらに続けた。
「その五郎って奴、何をして喰ってると思う？」
「……」

「家出娘を誑し込んで客を取らせ、上前をはねてるのサ」
「客を……」
唇を震わせる小百合に、直美は続けた。
「最近、五郎の奴がこんなこと言ってたそうだ。十二歳くらいの家出娘を仕込んでるってね」
十二歳……。
悦子のことなのか？
「あの……」
小百合はおそるおそる訊ねた。
「仕込むというのは……」
「ほんとうに何も知らないお嬢さんだね、あんたは」
直美は呆れたように肩をすくめた。
「年端もいかない若い娘にあれを吸わせるのが好きな男は、いくらでもいるのさ。それこそ、若ければ若いほどいい。五郎はね、そういう変態な客を抱えていて、家出娘をだまくらかして、そういう行為をさせるのが商売なんだ。わかるだろ？」
小百合は、嘔吐がこみあげてくるのを覚えた。あの悦子に、そんな真似を……。
「会わせてください！」
身を乗り出して、小百合は懇願した。
「その五郎という人に、会わせてください」
「会ってどうするのさ？」

「悦っちゃんを返してくださるよう、お願いします」
「あんた、馬鹿じゃないの？」
直美は、小百合に顔を近づけ、耳に押し込むように言った。
「あの五郎って奴はね、言うことを聞かない娘をさんざん殴って、歯を全部折ったこともあるような奴だ。なぜ、そんなことをしたか、分かるかい？」
「……」
「歯がないほうが、あれを吸われるとき、ずいぶん気持ちいいんだそうだよ……そういう非道な男にいくら頭を下げたって、おとなしく、はいそうですか、なんて言うもんかい。逆にあんたが無事に帰ってこれなくなっちゃうよ」
「でも……」
小百合は必死に言い返した。
「このままじゃ悦っちゃんが……」
その眼に涙が溜まっているのを見て、直美は口を噤んだ。しばらく小百合の眼を凝視し、溜息をついた。
「エンゼルって店に行ってごらん」
「……エンゼル」
「球撞き場さ。五郎は昼間、そこに入り浸ってる。たぶん、会えるよ」
わかりました……。小百合は頷き、深々と頭を下げた。
「ありがとうございます……」

「何がだい？」
「え？」
「あたいは何も教えちゃいないよ。五郎って奴のことも、エンゼルって店のことも」

ネオンで縁が飾られたハート型の看板に、大きく「エンゼル」と書かれ、翼の生えた天使が矢を構えた絵が描かれている。下のほうには「ビリヤード」と文字が添えられていた。

看板を見上げて、小百合は彫像のように動けなかった。口の堅い女給の直美からやっともらった手がかりをもとに、勢い込んで店の前まで来たものの、ドアの前に立ったとたん、恐怖が蘇（よみがえ）ってきた。

五郎という与太者に腕を掴まれ、物陰に引きずり込まれた。あまりの腕力の違いに、小百合はなす術もなかった。「すぐに田舎へ帰れ」と凄まれた。やっと首を横に振ると、いきなり殴られた。口の中で血が溢れた。

もう一度見かけたら、こんなもんじゃすまねえぞ。うずくまる小百合に、与太者は捨て台詞を残して去っていった。

茫然自失の状態から気を取り直したとき、小百合が真っ先に考えたのは、猪俣佐和子の差し金ではないかということだった。小百合は、佐和子が伊集院満枝にそそのかされ、川奈昭三を去勢した挙句に殺したのではないかと疑っている。そう疑っていることを、佐和子が知っているかどうかは分からない。だが、佐和子が自分の周囲から小百合を追い払いたがっていることは確かだ。

なぜかは分からないが、佐和子は不意に現れた小百合が邪魔なのだ。いろいろと理由をつけて

スワンに来ないよう説得しただけではすまず、与太者に頼んで小百合を脅したのだろう。

不思議と恐怖は湧かなかった。かわって怒りがこみあげた。たとえ、どのような目にあおうと、悦子が見つかるまでは帰らない。小百合はそう決心した。

そして、自分を殴った与太者が、年端のいかない家出娘に身を売らせていると知ったとき、その怒りは頂点に達した。なんとしても悦子を救い出す。夢中になってエンゼルという店を探し、そしてたどり着いた。たどり着くと同時に、あの与太者に殴られた時の恐怖が蘇ったのだ。

あんたが無事に帰ってこれなくなっちゃうよ……。

直美の言葉が脳裏をよぎる。そう、相手は、女を殴りつけ、すべての歯を折るくらいは平気な悪党なのだ。

悦子を救わねば……。勇気を奮い立たせようとしたが、からだは動かない。

どうしよう……。

女学生時代、あの山の中で、暴漢を前にした伊集院満枝の姿が浮かんできた。あの時、満枝は冷静に、暴漢の急所を蹴り上げ、失神させた。

自分に同じことができるだろうか。

五郎という与太者に胸倉を掴まれたとき、恐怖のあまり、小百合は全身が凍ったように動かなくなった。悲鳴をあげることすらできなかったのだ。

余りに無力な自分自身に、涙が溢れてきた。

背後で声がした。

「おや、小百合ちゃんじゃないか」

肩に手をおかれ、小さく悲鳴をあげた。振り向くと、加藤寅次郎だった。三十代半ばくらいの眼鏡をかけた男性と並んで立っている。
「おいおい、どうしたんだよ。幽霊でも見たような顔をして」
安堵とともに、嗚咽がこみあげた。寅次郎の袖を掴み、俯いて忍び泣く小百合を、連れの男はあきれたように見やって言った。
「なんだい、この愁嘆場は」

「このひとは、江戸川さんと言ってね、いま、売れっ子の探偵小説家だ」
小百合が泣き止むのを待ち、近くの洋食屋に落ち着かせてから、加藤は連れの男を紹介した。
「ぼくとは早稲田で同級生だったんだが、八年前にデビューして以来、なかなかご活躍でね。忙しくて会えなかったのが、ようやく久闊を叙する機会に恵まれたってわけさ」
「探偵小説なんぞ、あんたみたいなお嬢さんは読まないでしょう」
年齢にしては額が禿げ上がり、眼鏡をかけてはいるが、端正な顔立ちの江戸川は笑った。
「ぼくが書くのは、エログロ、ナンセンスの代表みたいなもんで、良識ある方面からはひどく不評だからね」
「江戸川君、言っておくが、彼女はもう奥さんだよ。お嬢さんじゃあない」
「おやおや、あまりに初々しいから、勘違いしちまった。失敬、失敬」
「いえ……」
恥じらいを見せる小百合に、江戸川は訊ねた。

「しかし、人妻が夕暮れ時に、あんなところで独り立っていたというのは、普通じゃありませんな。何かわけでもあったんですか？」
「ああ、それはね……」
加藤は、小百合が家出した悦子という少女を探しに東京に来た経緯を説明した。
「ほう、それで東京にね」
江戸川は運ばれてきたソーセージを口に運びながら言った。
「それじゃあ大変だ。家出娘がカフェの女給として働いてるなんて、この浅草じゃ珍しくないからねえ」
「あの……」
小百合はおそるおそる訊ねた。
「探偵小説を書いてらっしゃるのなら、警察とかの方面もお詳しいのでしょうか」
「うーん、ぼくはどちらかというと、警察とは折り合いが悪くてね」
江戸川は笑った。
「もう二年も前だが、雑誌に載せた小説がけしからんというので、警察に呼び出されて説教を食らった挙句、伏字だらけにされたことがあるんですよ」
「『悪夢』だろう」
加藤が笑った。
「読んだがね、あれはまずいよ。傷痍軍人とその妻をあんなふうに扱っちゃいかん」
「そもそも、あの小説の題名は『芋虫』だったんだよ。それを『新青年』の編集者が、あの小説

は夢だということにしてごまかすから、と変えさせられたんだ」
当時は検閲があり、出版物は雑誌であれ単行本であれ、事前に警察の審査を受けねばならない。あまりに不穏当な場合は発売禁止もありうるが、たいていは、問題のある部分を伏字にする処置がなされた。
「お国というのは、女性に性欲があっては都合が悪いと思いこんでいるものなんだと、教えられたよ」
自嘲気味に笑う江戸川の言葉に、小百合は顔をあげた。これまで、上の空で聞いていた江戸川と加藤の会話が、はじめて耳の中に入ってきたような気がした。
小百合は訊ねた。
「その小説は、どのようなお話なのですか？」
「興味ありますか？」
「ええ……」
江戸川は、小百合を見つめた。患者を診察する医師のような眼つきだった。しばらく見つめ、口を開いた。
「あなたは結婚なさってると聞きましたが、今回の上京を、ご主人はどう思ってらっしゃるんですか？」
意外な質問に、小百合は返事できなかった。加藤が代わって答えた。
「旦那さんは四ヶ月ほど前から、仕事で満州に行ってるんだよ」
「ほう、それは都合がいい」

江戸川は頷き、身を乗り出すようにして訊ねた。
「あんたは今、新婚ですね」
「はい……」
「四ヶ月もご主人と別れ別れで、お寂しいんじゃありませんか？」
江戸川の眼差しが、子宮のあたりに注がれているように感じられた。彼の眼はまっすぐに小百合の顔を見つめているのだが……。
はい、と答えるのが、やや躊躇われた。その短い躊躇いに、江戸川は何かを感じ取ったように、小さく頷いた。
「満州といえば、今、日本軍が支那軍と交戦中です。もし……もしもですよ、ご主人が戦火に巻き込まれ、手足を失い、言葉も話せず、耳も聞こえない状態で帰っていらしたとしたら、どうします？」
「え……」
小百合はうろたえた。
そう、満州は戦場なのだ。夫は今、戦場にいる。
「その小説の女主人公は、日露戦争で負傷した軍人の妻です。そして夫は戦場から、今、私が言ったような状態で帰ってくる」
「……」
「夫は、軍人として立派に戦いました。名誉の負傷です。恩給も出るから生活に心配はない。しかし妻は、手足を失い、口もきけず、話しかけても返事もできない夫と、死ぬまで一つ屋根の下

で生活しなければならないわけです。夫を捨てることは、お国のために負傷した英雄である夫の名を汚す行為ですからね。生き地獄だと思いませんか？」
「……わかりません」
小百合は俯いて首を振った。江戸川は続けた。
「ただね、そんな夫でも、失わなかったものが二つだけある」
「なんですの？」
「視覚と、性欲です」
「……」
「一方の妻は女ざかり。はっきり言えば、性欲をもてあましてる。となれば、二人が心を通わせあう行為は、ひとつだけ。そうは思いませんか？」
「江戸川くん」
加藤が口を出した。
「ちょっと、その話はやめにしないか。彼女には刺激が強すぎる」
「いえ」
小百合はまっすぐ江戸川を見つめて言った。
「その通りだと存じます」
「ほう」
江戸川が感嘆したように言った。
「あんたは、少なくとも警察の検閲官よりは、物分りがよさそうだ」

「それで、そのお話はどうなるんですの？」
身を乗り出す小百合に、加藤はあっけにとられ、江戸川も身を乗り出し、小百合に顔を寄せて言った。
「その妻は、芋虫のようになった夫を犯すんですよ」
「……犯す？」
「そう、夫の上にまたがってね。そんな妻を、夫は無言でじっと見つめている。妻には、その眼差しが、自分を責めているように思える。そしてある日、妻は夫の眼を潰してしまうんです」
小百合のからだの中で、熱いものが渦巻きはじめた。胸が締め付けられ、息苦しさに口が半ば開いていた。江戸川は続けた。
「夫の眼を潰した後、妻は後悔のあまり、許して、と夫のからだに指で文字を書く。そして夫は、口に筆をくわえ、許す、と部屋のなかに書き付けて、井戸に身を投げる……ひどい話でしょう」
「いいえ」
小百合は首を振った。
「江戸川さんは、そのお話を、夫婦の愛情の物語としてお書きになったんでしょう？」
江戸川は哄笑した。
「どうだい、加藤くん。君のおかげで今夜、ぼくは最良の読者と出会えたような気分だよ」
それから小百合のほうを向いて言った。
「家出娘の件、できるかぎりご協力しますよ」
「本当ですか？」

小百合は眼を輝かせた。江戸川はいたずらっぽく笑って付け加えた。
「ただし、ひとつ条件がある」
「なんですの？」
「もし、この話を材料に、私が小説を書いても、文句は言わないこと。それだけです」